

すべては混沌から始まる
- ヴィエスワフ・コタンスキ著『日本の神々の遺産』 意識・その1 -

松井嘉和*

All Things in the Universe are Derived from Chaos
A free translation of a chapter in Dr. Kotański's main work
explaining his understanding of the Kojiki

Yoshikazu Matsui *

Abstract

The late Dr. Wiesław Kotański (1915-2005) at Warsaw University studied the Kojiki during his lifetime. This paper is a free translation from the fragment of his main work entitled *Dziedzictwo Japońskich Bogów* (Heritage Kept in the Japanese Deities).

He insisted that the messages for a better life even in the modern world, which are left in the Kojiki, could be found by analyzing the epithets of the deities appearing in the Kojiki. In his book he analyzes the words *Takamagafara* and *'Amanominakanusi-no-kami* found in the first verse.

Usually *Takamagafara* is understood as *the wide field in the high heaven*, but he interpreted the meaning of this name as *the place of Chaos from which everything in the universe comes*. This interpretation is quite different from generally accepted understanding. As in the case of *Takamagafara*, his interpretation of *'Amanominakanusi-no-kami* is also unique. It is usually understood as *the master in the center of heaven*, but he understands this deity in the beginning of the Kojiki as *the master with power of life giving and of diffusing and encouraging its power and activity*.

キーワード

古事記・神名解読・混沌と神・高天原（たかまがはら）
天之御中主神（あまのみなかぬしのかみ）

*まつい よしかず:大阪国際大学国際コミュニケーション学部教授 (2010.9.30受理)

翻訳

すべては混沌から始まる

ーヴィエスワフ・コタンスキ著『日本の神々の遺産』意識・その1ー

松井嘉和

はじめに

第二次世界大戦後のポーランドの日本研究を支え、今日の同国の日本研究の隆盛の基礎を築いて支えてきた故ヴィエスワフ・コタンスキ博士（一九一五～二〇〇五）は、『古事記』研究をライフワークとして、人生の後半四十年を『古事記』の解説に傾注し、『古事記』をめぐる四十編を越える著書や論文を公刊させている。その集大成の書物が、ポーランドの教育省、科学研究委員会および高島記念財団の助成を得て、OSSOLINEUM（オソリネウム記念科学出版会）から一九九五年に刊行された“Dziękuję Japońskich Bogów”である。

同書は、『古事記』は人類にとって貴重なメッセージを伝えている文化遺産であるという観点から、そのメッセージに籠められた意味を解説した大作で、そのタイトルは、邦訳すれば、「日本の神々の遺産」となる。

『古事記』には現代にも訴える人生へのメッセージがあるととしたコタンスキは、『古事記』に登場する百五十ほどの神々の名前の解釈をそのメッセージの解説の有力な方法の一つとした。例えば、イザナギの命がアマテラス大御神誕生以前の『古事記』の主人公であるとして、その命が、国土の修理固成のためにイザナミ

の命と結婚し、夫婦で国生みと神生みの大事業を遂行されたことが物語から明らかのように、その二柱の神々の事跡がその後の日本人の理想的な行動のモデルとなったとする。そして、その神名に籠められた宇宙生成における意味を解説する。その結果、岐美二神の事跡は、偶然の行動ではなく、天つ神の仰せに従った行動であって、理想郷を現実化することをその後の神々と日本人に教えている、と言うのである。その教訓が神道の教えだとするコタンスキは、同書で神名の解説を通じて、その教えをスケッチすることができた、と述べている。

同書は、B五判ほどの判型で二段組みの二百七十六頁にも及ぶ大著である上に、全編が象徴的で諧謔に満ちた詩的表現に溢れるきわめて洗練された表現によって綴られていて、難解であることがポーランド人からも指摘されている。そのため、本稿では、その詩的表現の日本語による再現という難事業は断念し、コタンスキの『古事記』解説の内容の理解を主眼にして、同書を意識して紹介することにした。

同書の概要を知る一助にと、目次をここに仮訳として記述しておく。同書の構成はI～IIIの三部立てで、目次には、それぞれの部の下位に算用数字での章立てが示され、さらに、ローマ字により節が示されているが、以下には、部と章だけの邦訳を掲げておく。

はじめに

I 神祕を解く鍵すなわち聖霊伝達の形式

1 読者のために

2 情報伝達の日本の解決法

3 記念碑的名作の栄光回復への道はあるか

II 日本神話の秘儀の探究すなわち聖霊伝達の智恵

1 神話の内容から探し出せるもの

2 すべては混沌から始まる

3 自然界における永久運動の構想

4 三極以外の独神

5 最初の男女対偶神四代

6 一对の造物主の登場

7 造物主に下された至上命令とそのもたらすもの

8 造物主の最初の業績

9 天空と大地の間の連携

10 国生みすなわち神聖なる空間の拡大

11 島々への初めての入植

12 造物主の子孫

13 小宇宙に生じた混沌とその結末

14 火の変成と分断

15 黄泉国訪問

16 深淵な場での出来事

17 造物主の対偶関係の断絶以後に世界を担う者

18 魔除けの持ち場八カ所

19 洗淨の経過と海の気風による感化の初め

III 天の支配制度の黄昏すなわち太陽神の支配体制の基礎固め

1 三貴子

2 支配体制確立の要点

本稿で以下に紹介するのは、上の目次の第II部の第2章の全体である。なるべくコタンスキのポーランド語表現に即した日本語にするのが、紹介者としての責務だが、既述の通り、逐語訳ではない。例えば、同書のポーランド人の読者を意識した表現は改変し、名詞表現を日本語らしい動詞表現にしたり、語順は言うに及ばす文の順序も原文に縛られない姿勢で臨んだ。とくに、本文ではほとんど改行がなされていないのだが、段落構成に留意して改行し、また、表現されていない文言を附加するなどして、理解の便に供した。

第II部 第2章 すべては混沌から始まる

II-2-1-A 混沌はどのように考えられていたのか

ものごとのごく普通の過程は、常に過去の出来事から未来の出来事へと推移するものである。一方、人間の行う観察においては、もっぱらある過程の究極的段階を認識すること、あるいは長い過程で最終的に生じた出来事と直接に関わりをもつことがしばしばで、その後で、観察者たちは、その出来事の由来に興味が注がれて、それが生成してきた過程を知ろうと努めるようになるものだ。そして、そうしようとした時に、例えば、歴史的な学問研究であったかも通則のようになっていく経過の段階を逆転させることが生じている。この逆転の動因は、映画や叙事詩を作るときにも人々の心を捉えている。その逆転とは、あるできごとが徐々に段階を経てどのように生成してきたかを明らかにするために、最後の出来事から叙述を始めることであり、それは専門的用語で言えば、遡

及つまり物語の時の逆転すなわち時間の倒置ということである。本章の表題「すべては混沌から始まる」は、我々が時間を表現するにあたっては時の倒置を行わないが、そのことがごく当然のことだとは言えないことを読者にほめかしているのである。

物語は、たいてい平行した二つの軌道に沿って、始原より進展して流れていく。その一つは、日本の神話に見られる出来事を直に見たような口承である。その場合には、時間は何の障害もなく自然のままに流れて行っている。すなわち、宇宙の進展の歴史で、何らかの始源の瞬間からその次々と若い時代へと発展的に展開していくのである。これが概観するときの主要な流れであるが、第二の流れとする時間の倒置の契機は、神話の出来事に間接的にのみ関わりをもつて口承する場合に生じてきたのだろう。そして、その第二の流れの目的は、何よりもまず「秘儀の開示」なのである。聖なる文献が何を秘めているのか、その秘儀の十分な解明なくしては、我々にとつて、神話の主要な趣旨を描き出すことはできないだろう。しかも、その第二の流れの時間は、通常の時間とは異なった原則で流れている。それは、伝承者の解釈活動による時間である。解釈する人は、まずはじめに、書かれた文献で、ある方法でカムフラージュされた記録に出会うのである。そして、どういうふうにしてその記録がそうやってきたのかをある程度解明して、さらに推論をくだして、その解釈を立証しようと努力するのである。典型的な倒置がここにある。神話の制作者たちによって隠された秘儀の扉をわずかにでも開かせるために、どのような手順に拠ればよいのか、厳密に説明するのは難しい。とは言っても、認識論的研究にあつては、正しく選択された研究方法がその証明となっているのだから、少なくとも最も根本的だと考えられる時間の再現には根拠があるのだ。

神話に独自の筋書きを示すことは十分に限定して、秘儀の復原を無視する研究は、十全な神話研究とはならない。と言うのは、神話解釈の論証が適切であるとすると証拠が提示されていて、神話の扱いが見事であつても、それについて疑念を呈することは容易にできるのであるから、確かに読者の誰もが確認できるわけではないが、神話は事実無根の作り話が読者に提示されているのではなく、むしろ、それぞれの読者の前に秘儀の解説がなされ、それが、専門諸家により十分な根拠の論証がなされることが、早晚、強化されることを期待したい。このような条件での確信を確立させることは、おそらく成果をもたらすことだろう。

では、なぜ時間の倒置があるのだろうか。それこそが、本章で「混沌」という表現で問題にしているところだ。実は、それは、厳密な議論が必要な概念なのである。なぜなら、『古事記』のテキストでは図像文字つまり漢字が使われていて、ポーランド語での説明には当初から正確さを欠くポーランド語の得手勝手な選択という要素が介在してしまうからである。ポーランド語で説明するという目的で選択した *„hag”* (混沌) という言葉は、辞書を参照しての単純な操作の結果から出てきたのではない。それは、世界は一体何から始まっているのかという日本の神話の重要な秘儀を解明した一つの最終段階で行われた議論や検証のすべての過程を経た結果なのである。

日本の注釈者たちは、この言葉の二つの図像文字「混」と「沌」をどのように音読したらよいか意見の一致を見ていない。この問題ではないが、「序文」と古事記の上巻の冒頭の文脈の中では、宇宙の同じ状態が異なって表現されている。「序文」の中で一つの読み方は「コンゲン」で、もう一つは「マロカレ」と読む言葉に出会う。もともとシナ語である「混元」は、漢語でまとめられ

た文脈の中で用いられていて、確かに「混乱状態、天と地とが分離する以前の物質の混合」(藤堂・学研『漢和辞典』^(訳注①))という意味があるが、また、全般的に「まだその中に何も分離していない何か全体の古代的状态」(『日本思想大系1古事記』^(訳注②))つまり、漢文の簡潔な表現は、日本的な考え方を非日本的な世界観へと近づけてしまう試みだと考えることができる。その上、この表現は、その混合あるいは未分化は一体どうしてなのかはつきりしていませんのである。シナの普遍化はものすごく抽象的であって、古代の日本人にとってそれは仰々しいものと感じられたのだ。

「日本思想大系」本の注釈で提示されている「マロカレ」という日本語は、幾分かはこの状態を正確に表現している。「マレ・稀」という言葉と確実に同類であり、おそらく「マリ」(空にする、下痢、排泄物、糞)という言葉との関連を残しているのだろう。そこで、古代の混乱は、質的に区別されていない物質の流動する希薄な粥状のものとして表現されるという考え方が生まれる。ここで議論している断片は、「序文」では、すぐにこの物質が「すでに凝り」(すぐに凝固し)、その浮遊を確認し、そして、その浮遊する不安定な状態を知らせている。しかしながら、ここから、西郷が言っているように(『古事記注釈』^(訳注③))、太古の混沌は動きの状態だった、という結論が導き出せるかどうかは疑問である。「凝固、凝結、凝集、固まり等々」を動く何かそうした種類として考えることは困難だ。とくに、遠い昔の動きとして考えられることは疑問である。さらに、浮遊の観念を動きと同一視することは絶対にできないし、ある空間の中にぬりつけられたり、こぼれたりするものもつばら動きのないものとして考えられる。

次の節では、この古代の状態が実際の古事記の本文にどのような

に表れているか記述する。

II-2-1B 「古事記」上巻の冒頭句

上巻は非常にややこしい具合に始まっている。冒頭部分をどう音にして読むかについては種々の見解があつて、読み方は様々多彩だ。だが、その相違は、大体のところ最重要課題というわけではなく、今はさらに厳密な議論をするには価しない。その部分のそんなややこしさを考慮して、私の説明は、まだ中途半端だと自分自身が思っている訳文に基づいて始めている。つまり、神名の重要性の少ない部分は気儘にポーランド語に訳したままで検討したということである。とは言つても、誠実な感受性に基づいた態度があれば、様々な本質的要素が、原文に残された音声によって、今後解明されてくるだろう(交替した可能性のある音は括弧内に示した)。

その冒頭の部分とは、「amatuti アマツチ (ametu アメツチ) の初めに、(takananōfara タカマノハラ) に amanōminakanusi アモノミナカヌシ (amēnōminakanusi アメノミナカヌシ) という名のカミが出現した」であり、ここでもうすでに研究の眼前には様々な困難が幾重にも立ちはだかり始めるのだ。

括弧の中に示されたすべての表現は、概して従来の権威者たちが薦めている読み方である。それらは、意味論的なより深い理解のためには無益であるが、今のところは、形態としてはどれもが等しく容認されるものである。しかし、それにもかかわらず、従来の解釈家を満足させている上辺だけの解釈も存在していて、それは、神話の文脈に符合した適切な解決を導くことはない。しかし、takanagafara タカマガハラと amanōminakanusi アモノミナカヌシという読み方を支持する人もすでにいるのだが、こ

これらの言葉が書かれている漢字の中で「*amatu*:アマツチ」という読み方だけは、例外的な提案となつている。それは古代日本語の法則に裏付けられているのだが、この読み方に関して次のように言われている。つまり、a) *ama* アマ という形は *amē* アメより古い。b) どんな場合に古い形を適用して当てはめるのか、どんな場合に新しい形を適用させるのかはつきりとした基準がない。c) 古代の日本語の形だと考えられる原則に従つて、*amatu*:アマツチという語が辞書に採用されていない理由は、おそらく書記者たちがよく知られていた言葉 *amē*:アメツチ(何らかの別の意味がある)と同一視したからだろう。その同一視は、意味論上の結果を考慮しないで行われたのだった。

さしあたつては、*amē*:アメツチは、「天と地」あるいは「天の神と地の神」(『岩波古語辞典』による^{〔訳注④〕})を意味し、従つて、それに基づいて、日本の神話では、その宇宙の曙の時に、天と地が存在していたと考えてよいだろう。しかし、これを結論とするのは軽率なのかもしれない。すでに引用した『古事記』の冒頭の訳文の一部に「初めに」という言葉があつたが、それを厳密に翻訳すれば、「まさに生起したその時に」と言えるのであつて、その表現は、神々が出現した「*takamagata* タカマガハラ」という場所がある「*amē*:アメツチはそのときには存在していたが、その時までには出来上がつていなかった」と理解できるだろう。

『古事記』では天地が原初の太古から存在していたかどうかと、いうことに対して、強力な論議があるが、それは、「序文」と矛盾があるからである。「序文」の五番目の文章にははつきりと「天と地はそれぞれに分離しはじめた」あるいは「上に昇る要素と下に降りていく要素とがそれぞれに分かれはじめた」と述べられている。『古事記』の上巻に先行する「序文」は全体の一部であり、

部分的にその全体と一致している。だから、その「序文」にはシナの影響の層が覆つているという条件はあるものの、本文で言及されていないことをどうにかして推測する補足となる。

amē:アメツチを「天と地」とする原則を揺るがす重要な根拠として、さらに、全体的に古代日本の語彙では *kuni*:クニ(土地)が概して *amē*:アメ(天)の概念の対義語であつた(同じように天上と国土の罪が区分され、神々あるいは精霊の範疇も同様とされた)ということの立証を認めることもできる。これに関連して、ごく稀に *tsu*:ツチ(土)(地面、土壤、大地)が対義語の役割を担つていた。それについては、『岩波古語辞典』(一九八二)が *amē*:アメツチという言葉はシナ語の熟語「*ten*:天、*ti*:天地」(天空と大地)(日本では現在はテンチとなる)の言語的な翻訳の結果として人為的に成立した表現だと想定している。これはきわめてあり得ることだ。そこで、『古事記』の教養のある編者はどちらかと言うと人為的に作られたものを使わなかつただろうということは考えておく必要がある。それだから、ここでは、その時代にはしばしば起こつていたように、「天と地」という書記記号つまり漢字に関して、言語あるいは語の別の構成、異なつた意味を示していることも認めることが可能なのである。

そうすると、*amē*:アメツチが除外されることになる。それならば、*amatu*:アマツチとは一体何を意味するのだろうか。末尾に見える *-utu* は、辞書には、*wutu* = *wutu* = *wutu* つまり「現実、事実、現実」(幻想や錯覚等々と対照)という意味に相当すると記されている。声調の規制は、*utu*:*wutu*:*utu* となるので、*amat* を *amata* (数多、無制限性、際限の無さ、終わりの無さ等々)という形で補完して再現させ、その語の構成を常識的に求めると、*amata*:*utu* → *amat* (数多)*-utu* (現)となり「制限のない現実」

すなわち「実際に現実に生起するものすべて」という意味を得る。声調からもこれには問題はない。

ところで、正直言って、この天地は、もつとあり得そうな表現で、間違えやすく、間違いとなつていても知的欲求をかなり満たす表現なのである。だから、私も、以前の論文「Japofiskie Quod erat in Principio」(Euhemer¹⁹⁸⁶)^(訳注⑤)では、また、amētuiti アメツチという形態から超脱して考察を進めることがなかった。その後、今は、amē は、amī-nē → am-nē → amē「液体状の密度ある組織」「液状の物質」(飴、滴、どろどろしたもの等々)と生成してきたと考えている。そこで、すべての合成要素を声調に一致させて解釈すると、「液状の物質の目に見える世界」となる。すでに凝固したと知られる以前は、物質は、浮遊するものつまり「液体状、零状のもの」と考えていたのだが、その解釈では、細かすぎて、事実から離れすぎていると思うので、今はこの考えを改めようと思っている。

続いて解説すべき部分の秘儀は、「Takamagatara タカマガハラ」として知られている地域のことである。これは、たいていは表意文字が構成している意味の通りで、表音文字の四つの部分から形成しているとされる。つまり、takama-gatara「高い天井の広がり」(三番目の部分は所有格の助詞「が」である)。その構成要素のこのような意味論的解釈は、文書化された神話という範囲ではまったく根拠があることであった。なぜなら、地上の上方の解放された領域は、神話の作られた時代には天空の偉大な神々の居るところだと考えられていたからである。

だが、その解釈は、その名の比喩的な操作の結果なのだった。神話時代の観点では、混沌としたマグマ状態からまだ天も地も姿を現してはいなかった。したがって、神話創作者たちにとっては、

予め不調和なことを構想することは許されなかった。天空はなかったが、彼らは何らかのその予知をしていたのである。

日本神話は、インドやギリシャあるいはゲルマンの神話のような「改善する」という考え方の原則と関係している点では、少なくとも同類である。だから、その神話の秩序立てられる結末に注意を払うべきなのである。

この見解を支えるために、一九八八年に京都で開催された「世界における日本―方法と解釈」というテーマで行われたシンポジウムの際の C. L. E. Stearns の講演の言葉は引用に価する(なぜなら、日本神話の資料に世界の機構に対する一貫した見解を認めることができるからだ)。その講演の記録は、「世界における日本文化の位置」という題で会議の記録である論集に日本語で公刊されている。ここでは、その箇所を紹介しよう。

日本神話と同じ物語がインドネシアや南北アメリカにもあっても、それはいずれも断片的ですし、また、話も全く同一ではありません。日本の神話は、内容もつと豊かであるだけでなく、その構成もしっかりしています。(中略)

神話を構成するいろいろな要素が日本ほどしっかりと組み上げられているところはありません。八世紀の日本の文献ほど広汎な総合の材料を提供するものはありません。日本の文献が失われたモデルを忠実に写しているのか、それとも作り変えているのか、それはわかりませんが(コタンスキ補足…モデルとは有史以前のすべての人類に共通の神話、源神話ということ)、いずれにしてもこれらの文献は日本文化の特質をよく表しています。それには二つの面があります。日本は均質性の比較的高い一つの民族、一つの言語、一つの文化を

形成していますが、それに加わった要素は様々であったに違いありません。ですから日本はまず出会いと混和の場所だったのです。ところが、旧大陸の東端というその地理的位置や何度も繰り返された孤立のために、日本はまた一種のフィルターとの役割も果たしたのです。別の言い方をするなら、蒸留装置のランビキのようなもので、歴史の流れに運ばれて来た様々な物質を蒸留して、少量の貴重なエッセンスだけを取り出すことができたのです。借用と総合、シンクレティズム(混合)とオリジナリティ(独創)のこの反復交替が、世界における日本の文化の位置と役割を規定するのにもっともふさわしいものとは私は考えます。(訳注⑥)

というわけで、以上のような観点に従いつつ神話の韻律に一致して、いつそう古い解答を見出すことが必要とされている。

すでに述べたとおり、最も困難な問題は「天」とされる部分の *ama* に表れている。しかも、私自身、私は一九八四年まではその立場から離れることができないでいたのである。その年になつてやっと古い伝統から離別する最初の提言が私に示された。声調の原則にまだ導かれてはいなかったのである。Taka(高・*mi*(霊)-age(上)-fara(原) → takami-agafara → taka-maga-fara「崇高な聖霊が発生してくる場所」となる。しかしながら、それは適切なことではなかった。age という要素に関連する声調に関する疑念と関係なく、「崇高な聖霊が発生する」という語句の意味は、神道が皇族一族に死後の天上界での特権を保持させようというよく知られた儀礼上の動機という別の側面から上代の思想を導いてきたのである。おそらく、Takamagafara タカマガハラという地域の観念は、皇室の神格化(崇高な聖霊)の制度化よりもかなり古いのだろう。だから、そうした面を考慮する観点から、従来の

解釈に留まり続けるのは難しいのだ。

それでも、その後、やがて声調が正しく解釈基準の基礎となったときには *age* を、takami-agafara という形に符合する何らかの表現に変換する必要があった。その際、magaf(紛)という形態をもった「混ざり合う、それ自身が溶け合う、混ざって区別がつかない」の意味の動詞が十分に近似した声調があつて、さらに興味ある意味を示していた。そして、同じような意味のあるその他の表現は見出すことができなかった。もちろん、Taka(高) *mi*(霊)(崇高な聖霊)は、そのような見解とは共鳴していないかったのだが、「高い天空」としての takama の翻訳からは、そうした範囲からは「何も認識できないものしかない空間」ということが明確で、了解されているように、何かが生じたということすら認められないのである。もつとも単純な「天空」という意味を期待することを避けるためには、「混同、混合、混乱、混沌」という名詞に相当する magaf という要素が認知される。それは、古代日本語の言語に関する見解に完全に一致する結論となつていて、既述した『古事記』の「序文」の中で扱われているマロカレ hanrōkare(根元)という観念と意味論的に近づくことになる。「序文」で文献の本文との一致はもつとも重要な望ましいことである。Eke という限定詞が、一番重要だというわけではないが、最も意味のある解決を提言することは必要だ。しかし、それは単純な課題ではない。しかし、ある時は、wuto-aki → to-aka → taka ↓ taka「表明されていない、耳を聳るように鋭い」という意味の形態であったのだろうが、意味のある観念としてはたぶん Eke ↓ taka「継続する、長引く、続いた、絶え間ない」(声調に齟齬はない)となった。こうして Takamagafara は「長引いている混沌の地域」という意味をもつことになる。

その他の同義語 Takamanōfara はその地域の新しい名前なのだろうが、似たような意味内容の結果をもたらす分析方法で分析が可能である。takama no fara¹⁾ ta ke a mi wu mi fa ra²⁾ takama-wuni-fara → takama-wunōfara → takama-nōfara 「変わるらない紛糾や腐敗の地域」という意味になる。これはどちらかと言うと新しい表現だが、それより混乱はない古い表現タカマガハラ Takamagaſara を()³⁾では保持することしよう。

II-2-1C 神話の主要な主人公たち

上巻の初めの文言の中で、はっきりとしていない次の用語はカミkamiである。疑いもなくそれは、ポーランド語の *bostwo* (神性)、*bog* (神)、*bożyszcze* (多神の神々) といった言葉が、最も近い意味として関係がある。実際に、その対応関係は、日本語の表現の意味のおおよその内容に相当するし、説明に十分であるが、理論的な説明には、日本人自身の固有の文化伝統に由来するさらに深い意味の考察が必要である。なぜならば、現代の日本人は外から列島に移入された多種の世界観の影響下にあるからで、今日の日本人のカミkamiに対する見方も外国の要素によって、多かれ少なかれ、程度は様々でも常に潤色されているからである。この視点からは、日本語でのこの言葉がどんな環境の中に現れてきたのかを見ることは妥当だろう。

この言葉が他の言語からの借用または継受であることを証明する多数の調査がある。神を表すためのアイヌ語の言葉カマイkamiとの類似性に興味を惹きつけられている学者たちが少なからずいる。アルタイ系言語との関係を探っている人々もいて、kam とどう「シャーマン、祈祷医術師、非凡な力をもたらす人、等々」を意味する語も類義語として提示されている。一方、ツン

グース語での kam あるいは Khan (統治者) との関係も論じられている。また、日本語の語源だとしてクメール語の kamoi (悪魔) も提言されている。さらに、マライ語やサンスクリット語やセミ語や朝鮮語と等しいとも取り上げられている。アルタイ系に属するというのが最も説得力のある仮説だと考えられ、アイヌ語の形態は日本語の中の借用語として扱われている。日本語をアルタイ語に関連させる理論は、概して、比較的にもっとも遺漏なく記述されていて、そのカミkamiの論証の蓋然性はむしろ高いと考えられる。

しかし、アルタイという共通性は、もしその全体を想定したとしても、すでに数千年前にゴビ砂漠の境界を越えて成立していた可能性があり、そこから、ある一族が東に移動してやがて日本列島に至ったのだろう。その動きは幾百年も続き、進展したその種の言語は原アルタイ語からの分離が起こっていた。言語の系統を分類する研究者にとつて、アルタイ語族の確定は重要なことだ。とりわけこの語族の研究者にとつては、より古い時代の関係を否定する証拠はないものの、その語族の分離の歴史がいつそう重要な問題となっている。日本人の知識人自身が行ってきたように、カミkamiの語について熟考することには意味があるのだ。つまり、そのグループのすべての要素が列島に到達したとして、もしその言語が、大陸を駆け抜けた歴史の一駒があるならば、その最果ての日本列島にまでそれ自身に伴ってきたものすべては、長い経過の旅の果てに届けられた細々とした土産物として付随してくることができたと仮定できるのだろうが、しかし、それは、異国の密輸品として受入れられ難いものとしてではなく、個人的な手荷物による贈物だったと見なすべきものである。しかしながら、カミkamiがそうして新しく取り入れられた品の一つだと説明す

るものは何もない。

カミkamiという言葉についての現代の言語学の観点に立つて考察するならば、経験豊富な学者は直ちに、それが同質の単一のものから生成したのではないことに気がつく。なぜなら、その形態は日本語の言葉のどんなグループにも同根の関係が見られないからである。母音(例えば「i」と区別された「e」や声調のような細かなことが意識されることがなかったのは、比較的それほど古い時代のことではなかったし、今日でも未だに多くの論文で、そんな古風な方法が学問だとされている。しかし、真摯な研究者はそれを認めることはできない。

今や、カミkamiの形態の訂正が受け入れられる時が来た。カミという語のもう一つの意味である「お上、上役、頭部、上司、等々」つまりカミに役所や人間の上司や上位であることや上役であることの属性を見ることが認められていたのである。それは、日本の神学者の間では都合のよいことであって、今でもそんな都合な解釈が捨て去られていない。ところが、言語学者にとって、カミkamiが上役で、神kamiであることは「i」の母音が違うことも、声調も異なっていることも考慮されていないので、上と神を同一にしておくことはとても維持できない。こうした観点から、声調や母音変化の原理に一致させていないあまり一般化していない論証など他の仮説は無視して除外すべきだ。カミkamiという語の多様性については、いまなお開かれた検討課題なのである。

カミkamiが日本語のどんな語彙とも語源的に関係がない孤立した独自の言葉だという主張の証明は、今は諦めることにするが、そうすると、それが複合的な言葉であるかどうかが解決の原理となるだろう。ともあれ、この理論を確立させて論拠とすると、分割の一つの可能性として、mi¹という部分の抽出がある(ami¹と

いう形態は認めることができない)。その上、辞書にはこのような形態のもう一つの意味として「甑、篩、濾過器」があり、それは考察している合成語に有益だとは思えないが、その語の注釈には動詞「種を蒔く、まき散らす」という動詞と同系だとするものもある。そうするならば、mi¹は「蒔かれたその物、まき散らす、その蒔く物等々」の意味をもつ動名詞形の名詞だと認められる。mi²という部分は、そんな動詞の目的語だろうから、特定の善や徳や力の「授与者、分配者、種蒔く者」としての神という考えは、はずれの推定だとは思われない(「豊かさを授与する者」としての「神」、「とくに暖かみと生命等々をもたらす授与する者」としての Dazbog という「古代スラブの神」等を参照)。

それでは、ka¹とは何だろうか。その音には、ただ一つの意味が見いだせる。それは「鹿」だろうが、意味ある関連が考えられない。そこで、冒頭の音を、古代日本語によく見られる消滅があった、wu¹ か yu¹ を補足して議論をする道が残されている。こうして、wuka あるいは yuka という二つの可能性が出てくる。ウカ「食料、滋養、栄養」となる道理に叶った一貫した意味に惹かれるが、別の箇所でも、食糧(wuka)を保護しているさらに三、四の神々が神の一覧の中に知られる。だから、ウカwukaは、明らかに意味が限定されたものである。と言うのは、カミkamiは基本的概念の用語だからである。そこで、yike¹という形に注目され、声調を考慮した形態を求めると、yika¹あるいは yika²となつて、意味は「強い生命、寿命、活力」が導き出される。それは yike¹ という形から苦もなく生じている。yike¹は「元気づける、生命が具現する、導く」という意味で、さらにそこから yie¹「力溢れる生命、生命力、エネルギー」という言葉からカミkamiが現れた。結局、カミkami神は、「元気を蒔く(授与する)者、生命、

活力、活発さ、エネルギー」という意味をもつ *yika* と *mi* の結合として派生している。この用語は、一世紀ごろに、そのころまでは様々に（例えば、力、威力、執行者、実現者、元凶者などとして）理解されていたあらゆる神々を一般的に定義するものとしておそらく構成されたのである。

カミ *kami* という語の成立は、アニミズム（この用語を原始的な宗教に限定していない）と名付けることができる新しい信仰段階の形成へと向かったということの明確なシグナルとなっている。その当時、この語は、人々が物質のあらゆる種類の動きに人々が一定の生命力を賦与し、その生命力が形になったものであり、人々が認知している対象物とは、たいていは精神的な存在でありながらもしばしば知られている対象とは関係なく、常に確かな存在を与えているのである。これ以前の段階は、何よりも、あらゆる対象は自然条件の変化によって自然に表示される目的に向かうという信念であるエンテレケイアかあるいは生殖崇拜であった。アニミズムの段階は、生殖崇拜を徹底的なやりかたで抹消したわけではない。もっぱら、当該の物質をその他の存在に依存するという理念を物質の自己展開や自己制御の理念の代わりをすることなのである。

同様に、生殖崇拜は、さらにもっと早い段階の後に続いたのであって、それはダイナミズムと名付けてもよく、それは、様々な客観物に賛嘆や恐怖や崇拜を喚起する威力の厳選を見ることであり、まだ宇宙生成の過程やこの現実の世に与えられている物体役割が何であるかについての理解と結びついていないのである。この段階では、火は火をつけたり聖化する要素で、雨は土地を潤す湿気であり、山は天上の空間に達する山塊である。このように単純に自然を理解することは、ことあるときに知らされることがあ

るように、我々の時代までも信仰や神話の中に生き残っている。そのように、アニミズムは本当にすべての過去の相続者であり、ここで、カミ *kami* という用語が生殖崇拜やダイナミズムの感覚の残余から解放されていることはないのである。

II 2 D 「1」アマノミナカヌシノカミ 宇宙の最初の神

列挙している説明から明らかのように、カミ *kami* は概括的包摂的な概念であり、だから、それぞれの神々は、自身を個別化させている名前をもっていなければならない。その名は、適切な解釈を求めることによって、現実世界でその神に与えられた宇宙生成の役割が何であるかを我々に示している。そればかりか、日本の神話は、それぞれの神の出現が、宇宙生成の新しい行動の開始と同一のこととなっていて、その一連の行為が宇宙生成の段階を形成しているという構成となっているのである。

というわけで、本書では、以下の論述で、言及する神々に「」の括弧の中に通し番号を付して、それぞれの神の個別の存在意義に言及する。通し番号は『古事記』の原文に登場する順序と一致させる。しかし、原文の中には、様々な異形の名称が現れていて、その神が並はずれた意義をもっていることが論じられ、神々は現れた場所でこそその意義を獲得することから、他の研究者たちがその神を同一と見なさない場合も考えられたとしても、本書での番号は一致させる。そこで、本書で付した神々の番号は、かならずしも西宮一民が付した番号（一九七九）^⑥とは同一としないだろう。また、番号を付された神々が、名称の最後尾のカミ *kami* が常にあるわけでもないが、その限定詞は省略する。

名称「1」アマノミナカヌシは、宇宙生成の出来事の中の一つについての情報をそれ自身でもたらしてくれている。そして、も

し神話が適切に整理されていれば、太古の日本人の考え方の最初の行動の人格化が、その形の中に認められるべきだろう。『古事記』の解釈で伝統的な訳文では、神名の表記に使われた漢字に即したいわゆる文字通りの解釈があらゆる伝統的解釈に保持されていると思っても間違いではない。つまり、それは、「天の中心の聖なる主」という解釈だが、これは宇宙生成の最初の行為についての情報を示していないだけでなく、「聖なる中心」という抽象的な観念が導き出されている。さらに、最初の神の出現段階ですでに「天」が何らかの形で設定されているし、その天の出現はまだ記述されておらず、その時にはあり得ないのだ。

ここで、認められる可能性があるのは、ただ以下の点ばかりである。

- a) 記述の通りであると認めること。
- b) その文章は確認されていないので、何らかの調整が必要とする。

c) アマノミナカヌシ *ama-no-mi-nakanusi* と読まれている漢字で書かれているが、それはひとえに神名の発音が図像的な表記で記されているだけであって、その漢字による発音は文字が担っている意味とは関係なく、神名の意味は解説する必要があるのである。

c) の要請に対応して、心から納得できる解釈に到達するのは困難であるとしても、解決の実現を目指すことが必要だ。なぜなら、a) の要求は文脈から矛盾するし（つまり天はまだ形成されていないはずなのだ）、それにまして、b) の要求に尽力するのは余りにも安易だと認められるからである。これらの三つの可能性は、『古事記』の原文の注釈者のもっとも多数を占める優れた人々の一群が一致して a) か b) という外れた方法に方向性を取

るのが習わしとなっていて、それは『古事記』の神々の名前の解釈のほとんど全てのケースで選択されているのである。しかし、示された解釈が文脈に合致しているかあるいは正確性に叶っているかどうか問われるべきであり、場合場合で c) に提示された疑問を受け入れることになるだろう。

問題にされる漢字表記は、音を含んでいるだけでなく、*ama-no-mi-nakanusi* となるように、ほとんど全ての音に声調の再現が認められるのである。こうした中で、最も手近なのは最後の *nusi* から検討を始めることである。『古事記』には、その部分をもつ名称が数十もあり、その最後の部分によってしばしば人格化や神格化の意味の表示となることが期待されている。つまり、*nusi* は、「主人、家主、支配人」の意味であり、または、「所有者、支配人、統治者等々」を意味する *usi* という部分だけを用いて翻訳することも可能である（確実に *wosu* 「統治する、取り仕切る」と同類である）。

これに前置された部分は *kan-* で、それは困難もなく *kane* 「見渡す、見張る、世話をする、監視する」と解釈できる。次には *kane* の補語として選び出せる *nomina* や *minaka* がある。この支配人は何を監視するのだろうか。筆者コタンスキは、一九八〇年以来、すでにいくつかの解決策を提示してきているが、想念していた混沌の神 (*Takamagahara* タカマガハラの統治者として) が自身の名称が分析される状況を執念深く観察していて、私が何がその神の本性に合致するかについて考えようとすると、その構成要素の適切な確定を承認させないかの如く、まさにその名が担っている混沌という機能が研究の過程に入り込んで、私を混乱させてきた。混沌の神が、実際に自身の働きが偏在することを実証しながら、私の目指す秩序を乱してしまっていたのである。そんな

神名の影響だという以上の一言は、半ば冗談だが、ともあれ、考察してきた名称の意味を示す様々な形容句が、形態的考察によって次々に否定されてきた。一九八〇年には「全部 (mina 皆)」で、一九八四年には「静止・安定 (naki, nagi: 風)」一九八六年には「居眠り、睡眠状態 (yine, ne)」と私は解釈したのである。

ところが、一方では、最近、古代の感覚を新しく再構成するチャンスが生じている。チャンスは、以前の証明にも真実に何らかの接近を達成していたものもあるが、今回は真実にいつそう近くなる希望と結びついている（真理に一步一步接近することは、研究の代表的な特徴の一つである）。

新たな分析の材料となるのは、以前は誤って「皆」とした *mina* *mina* である。*mina* の分析の一つの可能性として *mi-na* という構成を認めることができる。すると、*na* が「寝」ではなくて、「不在、欠席、生存の形跡のないこと、無、非存在」の意味をもつ *na* *na* *na* シという形容詞の語根である公算が高い。その上で、*mi* *mi* には多くの意味があるが、注釈者に応じて選べば、後ろにある「膿、腐敗」の意味となる *wumi* *wumi* の部分（声調の状況が十分に明確ではないが、これは明らかに *mi* と *mi* だと考えられる）が縮約されて *mi* となっていて、*na* *na* と関係するそれに近い意味が提言される。そこで、神名の後半部分の意味の再現は、「活力の崩壊と欠落を監視する管轄者」となる。これが、秩序立て、組織立て、破壊されずに物質の発展を可能にすることの反対者としての混沌の描写のようなものである。

このような描写は、『古事記』の序文にある *marōkare* *brokale* (混元) という表現がはっきりと裏付けている。マロカレとは、物質の解体状態と生命表象が欠落した粥状に名前が与えられているのである。このような描写は、宇宙生成の第一段階を見事に描き出

して、そのとき、あらゆるその後の段階が存在物とその生命力の付加つまり生命の表象の解体と欠落に対峙する組織化を導き出すことになるのである。

まだ冒頭の章句の部分で説明すべき箇所が残っている。それは、*'amanō* あるいは *'amanōn* である。*'ama* を「天」と翻訳するのが不適切かあるいはまったくの誤りだと評価し、また、*'ama* を最小の単位に分割する可能性がないので、*'aman* という形態を基礎として考察するまでに広げることが認められる。その形態は、*a'mane* (全ての領域、至る所、遍く) という意味の表現の最後の母音を除外した結果で生じていて、それが、*no* あるいは *noimi* あるいは *omi* と結びつけて、*'amano* という形態になっているのである。異形の *no'imi* (手を伸ばす、伸びる) を選ぶことによつて、混沌の神の全体像は、「腐敗を得ようと努力し、至る所に伸びて偏在する元気に欠けている統治者」「他の可能性として、たぶん可能性はかなり低い形だが、「あらゆる所に広がっている細分化された物質を世話する主人」という意味にも注目できるのであって、「物質」は *no* (根、根本、基底、実在物、物質) から派生した形態 *na* のだろう、ということに留意して欲しい」。

論じている神は、典型的な死、消滅、瀕死に関係しているのではなく、より大きな全体の一要素としてその行動がまだ統合されていないで、宇宙生成の経過が始まっていない初源の様子について述べているのである。しかしながら、その混沌状態と宇宙生成の行動との様子は、それぞれ互いに近似しているのであって、それだから、後に秩序および職務遂行に対するいい加減さが原因となつて混沌に逆戻りすることがあり、その逆戻り一つ一つが解体や消滅や死亡に近づいていくことを意味することになるのである。その結果、*'Amanomikanusu* *Amno* *Minakausi* の名は、

「生命をもたらす種、活動の鼓舞、威力の散布」の意味をもつ *yo-kami* ノカミという限定詞とのつながりが名称の内容とある意味で矛盾しているのだが、その難点はこの神名にだけ現れることができる。この矛盾を解決するために、以下のことを確認することができる。1) 「生命力、活動力」は、非常な幸運と同意で、その名の本性（結局は「力の付与」あるいは「物質を構成する要素を活発にしてその活発化を抑制の実現者」——これらはいまだ矛盾を解消してはいないのである）を考慮しないで、名称に示されている宇宙生成の職能について言及しているのだ。2) 神々の役割に関するいくつかの情報は消し去られている新しい時代になって、*yo-kami* ノカミという限定詞がかえって付け足されはじめているので、矛盾は意図されたものではなく、例えば、ポーランド語の翻訳ではそれに倣わなければならないわけではないのである。

ここでついに『古事記』の原文の冒頭分の言葉を、いままでは部分部分に分析をしていた全体を正確に翻訳する試みが可能になった。それはつまりこうである。「混沌が続いている地域に崩壊を推進させる、と名付けられているいつでもどこにでも達して生命の活力の不足に種子を散布する力が、際限のない現実の原初に出現する」となる。

このように考えれば、神道的な宇宙生成論では、すべてが混沌から始まっているのであるから、逆説的に、神道的な宇宙生成論は、混沌が何らかの秩序の出現の根源となる（原初の混沌がなければ、その後の秩序についての言及もないわけである）、ということを確認しているのである。すべてが「天の中心」から初まっているという、様々なところで認められている従来通りの理解ならば、それは、最早信用に欠けるのだと覚知させる権利がうまれ

ている。従来解釈は、世界の起源に関する典型的な描写とは相反するものだろうし、最も避けるべきであって、日本に相応しい原文からのいくつかの情報と矛盾することにもなるのだと私は主張する。

訳注

訳注① 藤堂明保『学研漢和辞典』学研マーケティング 一九八〇

訳注② 青木和夫『日本思想大系(1) 古事記』岩波書店 一九八二

十八頁の頭注に「日本古代の観念ではアメに対応するのはクニである」とみられ、ここがアメツチ(天地)であるのは注意すべきである。」とある。

訳注③ 西郷信綱『古事記注釈』第一巻 平凡社 一九七五の七十頁で、著者の西郷氏は、『古事記』の冒頭句の「天地初発」を「アメツチノハジメ」と訓読するのは、『古事記』の序文にある「乾坤初分や「天地開闢」とずれていることだけでなく、「あまりにも静的」だという理由で、「アメツチハジメテヒラケシトキニ」と訓読することを提言している。

訳注④ 『岩波古語辞典』岩波書店 一九八一年版には次のように説明されている。「あめつち」【天地】《天地》の訓読語か。古くは、アメは天界の意で、地上の「クニ」の対」

訳注⑤ 『Japonskie Quod erat in Principio. "Euhemer" vol.139. NO.1 1986. ワルシャワ。松井嘉和訳「日本の」はじめにありしもの」は何か』大阪国際大学紀要』第9巻第1号 一九九七

訳注⑥ 『日本研究』第一集 国際日本文化研究センター

訳注⑦ 西宮一民『古事記』新潮日本古典文学全集 一九七九の付録には「古事記」に登場するすべての神名について、「初出順に記し、アラビア数字で通し番号を付し」て「解釈と解説を施し」た一覧表がある。